県営圃場整備事業（昭和50年度）

埋蔵文化財緊急発掘調査報告

太田，保春日子

1976

長野県上伊那郡飯島町教育委員会
南信土地改良事務所

信州大学附属図書館
受入

太田ノ沢春日平遺跡緊急発掘調査報告

県営圃場整備事業

昭和５０年度

1976

長野県上伊那郡飯島町教育委員会
南信土地改良事務所

序

飯島町は、昭和48年８月より全町にわたり、県営圃場整備事業を実施している。この太田ノ沢春日平遺跡の緊急発掘調査もそれに関連して南信土地改良事務所より委託されて、同50年８月行なわれたものである。

飯島地区は町の中心部、西は越百山、南駒ケ岳にまで続く山地帯が約８㎞にわたって広がり、山麓には中田切川と与田切川とによって形成された扇状地とその下方に続く三段の段丘面が天竜川に面する段丘崖まで３㎞余り続いている。北は中田切川によって駒ケ根市に境し、南は与田切川によって七久保地区に境されている。北の中田切川と南の与田切川によって形成されている古い扇状地、それを更に、これらの河川とその中間を流れる郷沢川太田ノ沢によって浸食が進められ、加えるに山地帯の隆起運動のために傾斜が急流となり開析が進んだ。そのため砂礫の流出が著しく、この土砂が山麓に堆積されて再び新しい扇状地が各地に形成されている。太田ノ沢と孫太沢とにはさまれた段丘上に田切中原遺跡があり、ここから北に太田ノ沢春日平遺跡が展開していると考えられる。

今回の発掘調査によって遺跡内から縄文時代の住居址１、ロームマウンドを伴なう土壙１、配石２が検出された。住居址は小形のまとまった形のもので出土遺物も多く貴重なものである。当遺跡は古くは中田切川が流れていたと思われる湿潤な低地であり、今後の集落研究の上に大きな成果をもたらしたと考えられる。

この調査を実施するにあたり、調査団を結成し、長野県教育委員会桐原指導主事のご指導を仰ぎ、調査団長に友野良一先生、調査員に伊藤修、和田武夫両氏を依頼し、この事業を遂行しました。最後にこの成果に対し、南信土地改良事務所をはじめ、県教育委員会、調査団の諸先生、高尾春日平等、地元町民の皆様に深甚なる謝意を表する次第であります。

昭和51年２月29日

飯島町教育委員長　**北　原　健　三**

凡　　例

1．この調査は、県営圃場整備事業に伴う緊急発掘で、調査は南信土地改良事務所の委託により、飯島町教育委員会が実施した。

2．本調査は、50年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし、文章記述はできるだけ簡略にし、資料の再検討は後日の機会にゆずることにした。

3．本報告書の執筆者は次の通りである。担当した項目の末尾に執筆者を明記し、その責任を明らかにした。

友野良一、森谷栄一、箕浦税夫、伊藤　修　（順不同）

図版作製者

◦遺構及び地形

伊藤　修、宮下喜代子

◦土器実測図

伊藤　修

◦土器拓影

宮下喜代子

◦石器実測図

和田武夫、伊藤　修

◦写真撮影

友野良一、伊藤　修

4．土器復元は、和田武夫氏の手をわずらわした。

5．本報告書の編集は、主として飯島町教育委員会があたった。

目　　次

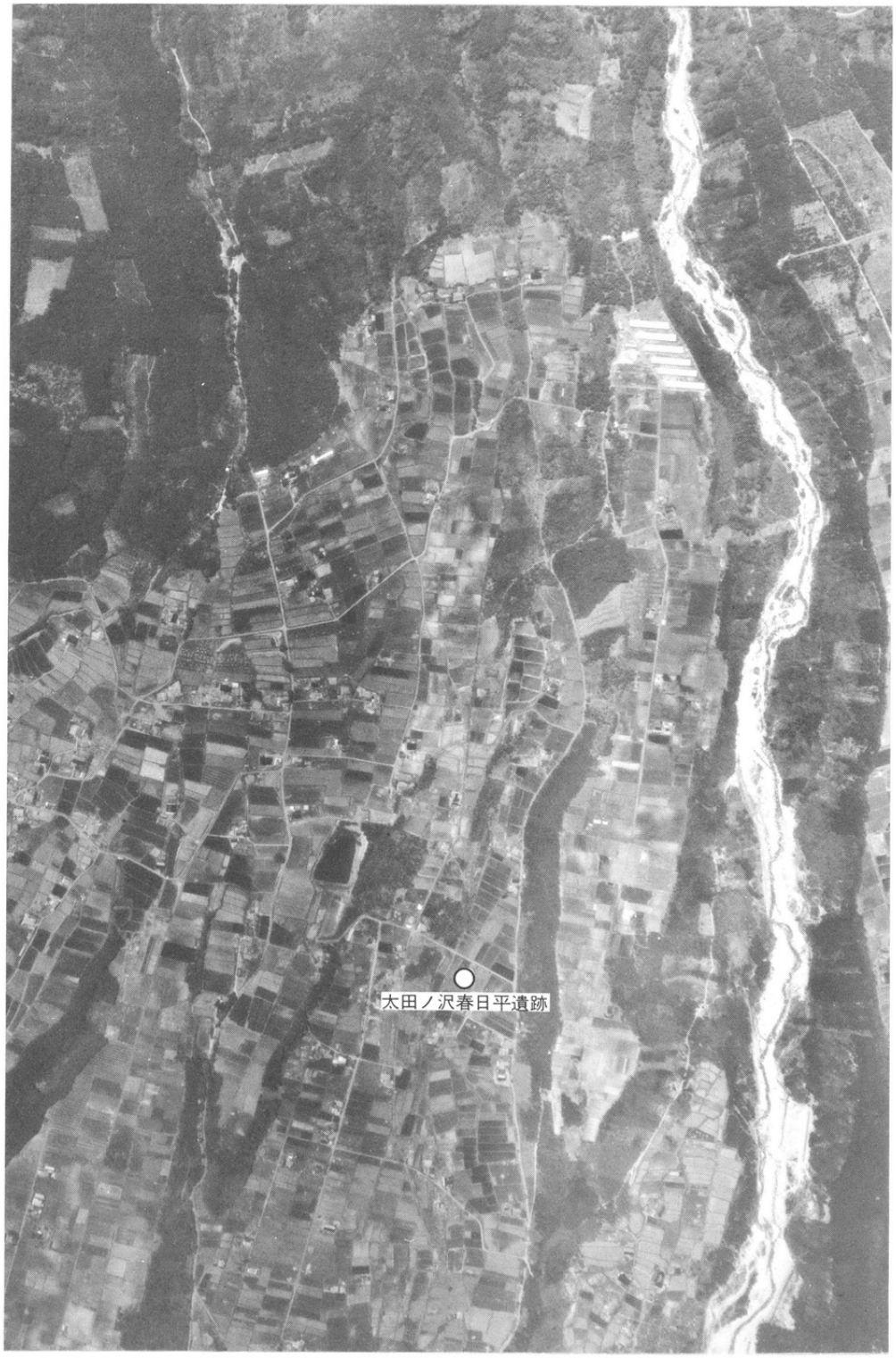
序
凡　　例
目　　次……（1）
挿図目次……（2）
図版目次……（2）
第Ⅰ章　環　　境……（4）
第1節　位　　置……（4）
第2節　地形・地質……（5）
第3節　歴史的環境……（5）
第Ⅱ章　発掘調査の経過……（7）
第1節　発掘調査に至るまで……（7）
第2節　調査日誌……（8）
第Ⅲ章　遺　　構……（10）
第1節　住居址……（11）
第2節　その他の遺構……（12）
第Ⅳ章　遺　　物……（14）
第1節　第1号住居址の遺物……（14）
第2節　第1号土壙の遺物……（15）
第3節　その他……（15）
第Ⅴ章　所　　見……（17）
あとがき……（30）

挿　図　目　次

第１図　位　置　図　（１：150,000）……（４）
第２図　地　形　図　（１：3,000）……（６）
第３図　遺構配置図　（１：400）……（10）
第４図　第１号住居址　（１：60）……（11）
第５図　ロームマウンド（１：80）……（12）
第６図　第１号土壙　（１：80）……（12）
第７図　第１号集石　（１：30）……（13）
第８図　第２号集石　（１：30）……（13）
第９図　縄文式土器　（１：４、１：６）……（19）
第10図　縄文式土器　（１：３）……（20）
第11図　縄文式土器　（１：３）……（21）
第12図　縄文時代の石器　（１：３）……（22）

図　版　目　次

図版第１　遺跡遠景・近景（南東、西より）
図版第２　遺跡近景（東、南より）
図版第３　第１号住居址、第１号土壙
図版第４　第２号集石、記念撮影
図版第５　遺構、遺物出土状態
図版第６　出土土器
図版第７　出土土器



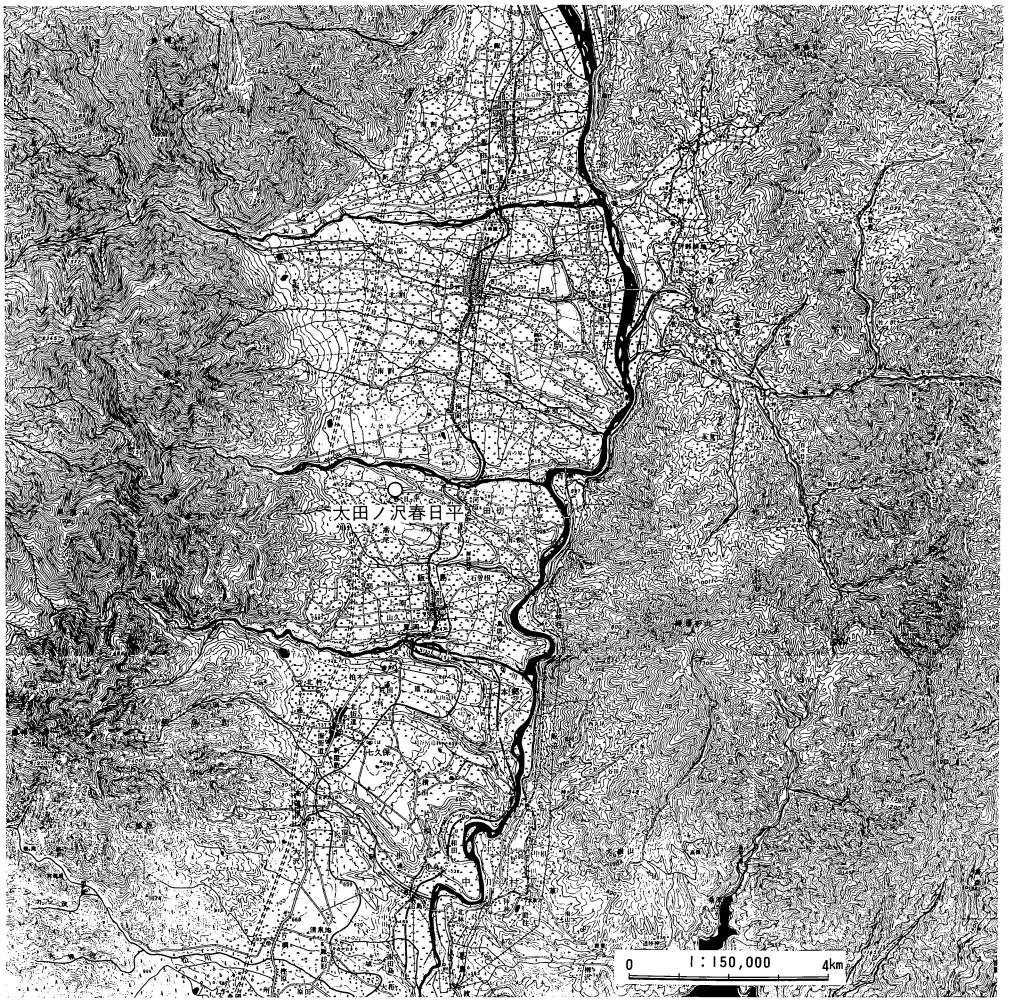
遺 跡 航 空 写 真

第Ⅰ章　環　　境

第1節　位　　置

太田ノ沢春日平遺跡は、長野県上伊那郡飯島町大字田切161番地に所在する。当遺跡は田切地区の西端に位置しており、中央アルプスの麓にあたる。遺跡に至るには、国鉄飯田線田切駅で下車し、駅の南を東西に走る太田ノ沢にそって西へ約1.5㎞ほど歩いた所である。

（伊藤　修）



第Ⅰ図　位　　置　　図

第２節　地形、地質

木曽山脈と赤石山脈に挾まれた伊那谷は、一口に南北に細長い縦谷状地形といえる。この中央部を天竜川が南流し、天竜川に向かって西の木曽山脈、東の赤石山脈に源を発する中小河川が流れ込んでいる。これらの中小河川は山麓にいくつもの扇状地を形成したが、その後の隆起運動により、これらの扇状地を自ら浸食していった。

飯島町についても、中田切川・与田切川・日向沢川等の中小河川の浸食・堆積作用により扇状地が発達している。太田ノ沢春日平遺跡は、天竜川に流れ込む小河川の一つである太田ノ沢の低地に位置している。当遺跡の北側は、中田切川が流れ、太田ノ沢と中田切川に挾まれた久根平は、東西に細長い丘陵となっている。また遺跡の南側は、南東に広がる扇状地となっており、この扇状地と太田ノ沢の間には、中原と呼ばれる巾の狭い段丘がみられる。遺跡の標高は中心で711ｍを計り、北側の久根平との比高は30ｍ、南側の扇状地との比高は23ｍである。

遺跡内の地形についてさらに詳しくみると、沢の基底部は北側に寄っており、そのため北東に向ってゆるやかな傾斜がみられる。

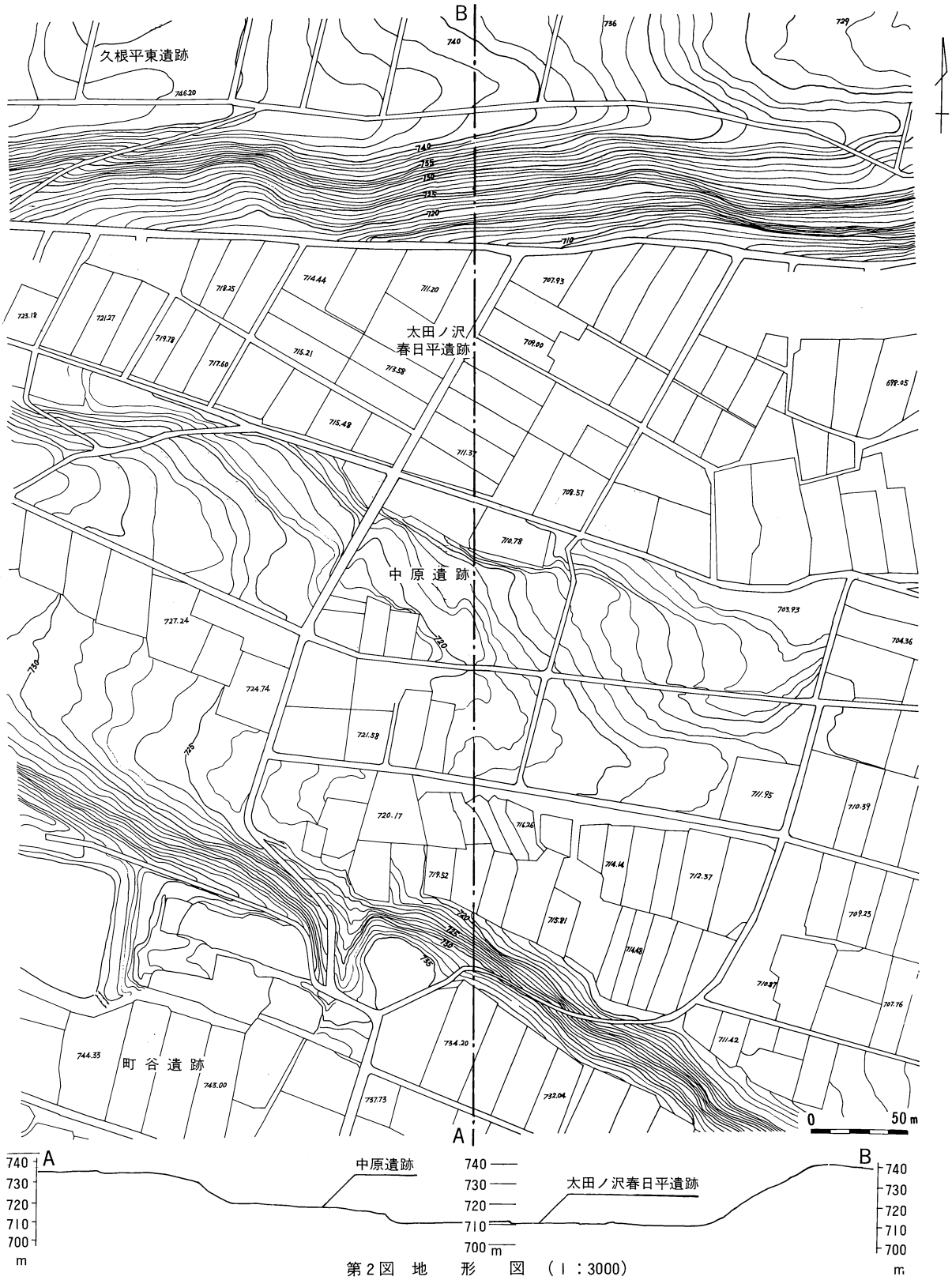
地質については、沢であるため最下部には、砂礫層がみられ、その上に砂質ローム、暗褐色土、黒色土が存在した。遺構はローム層を掘り込んで造られており、遺物の包含層は、暗褐色土、黒色土である。

第３節　歴史的環境

飯島町では現在100箇所以上の遺跡が確認されている。これらの遺跡については、長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(上伊那郡飯島町内その３)、町谷遺跡埋蔵文化財緊急発掘調査報告書等に記載されているのでそれらを参照されたい。

当遺跡のある春日平・高尾の山麓地区は、遺跡が特に密集している地域である。南から、高尾第１、高尾第２、町谷、庚申平、中原、久根平等の遺跡があげられる。これらの遺跡のうち、高尾第１、高尾第２、町谷、中原の４遺跡は集落を伴なう大遺跡と思われる。

時期的にみると、縄文早期から前期にかけての遺跡として高尾第２遺跡、前期末から中期の遺跡として中原遺跡、中期の遺跡として高尾第１・町谷遺跡、晩期の遺跡として中原遺跡がある。　　（伊藤　修）



第2図　地　形　図　（1：3000）

第II章　発掘調査の経過

第1節　発掘調査に至るまで

県営圃場整備事業飯島地区4の3工区にある埋蔵文化財の調査として、太田ノ沢春日平遺跡発掘調査を南信土地改良事務所から委託を受け行なった。

発掘調査に至る経過を簡略に記してみる。

昭和50年5月　飯島町教育委員会で、太田ノ沢春日平遺跡の分布調査を行なう。

昭和50年7月　長野県教育委員会桐原指導主事来町。役場にて、南信土地改良事務所、農林課、飯島町教育委員会を交えて協議を行ない予算額を算出する。
南信土地改良事務所長と委託契約を締結する。

〔発掘調査団〕

団　　長	友野良一	日本考古学協会々員
調査員	伊藤　修	飯島町教育委員会
〃	和田武夫	長野県考古学会々員
調査補助員	片桐　修	飯島町文化財調査委員
〃	北原健三	〃
〃	山口　繁	〃
整理作業	宮下喜代子	飯島町

〔調査事務局〕

事務局	織田正巳	飯島町教育長
〃	森谷栄一	飯島町教育次長
〃	箕浦税夫	飯島町教育委員会主事
〃	片桐文子	〃

（森谷、箕浦）

第2節　調査日誌

7月24日　本日より調査を開始する。午前八時半、現場にて簡単な結団式を行なう。草がのびているため、調査予定地の草刈を行なう。

7月25日　昨日できなかった所の草刈を行なう。午後グリットを設定する。テントを張った水田に基点（ＣＡ50）をとり、それより西へＢ地区Ａ地区、東へＤ地区Ｅ地区とする。グリットは２ｍ角とし、西から東へ向ってＡ、Ｂ、Ｃ……Ｙとなり、基点から南へ49、48、47……、北へ51、52、53……となる。

7月26日　Ｃ地区の数箇所を調査する。どのグリットからも黒色土中より、土器の小破片が出土する。遺構は確認できない。

7月28日　Ｃ地区の調査を行なう。ＣＨ41グリットに、ロームの盛り上がりがみられたので付近を拡張する。遺物は、大多数が黒色土中より出土するので、黒色土層で一旦止め、その後ローム層まで掘り下げる。

7月29日　土壙ではないかと思われるロームの盛り上がりがみられた付近を拡張する。ＣＫ40グリットより、土器が一括して出土する。土壙の東側より、小規模の集石が検出される。土壙、集石とも遺物の量は、比較的少ない。

7月30日　土壙の付近を拡張する。土壙のまわりにも数箇所のピットがみられる。ＣＰ50グリットから土器が集中して出土する。土器は細かく壊れている。土壙、住居址が考えられる。

7月31日　昨日の土器の集中したところは、住居址となる。第１号住居址とする。土器は４箇所に集中している。土壙は、清掃を行ない写真を写す。本日より、Ｂ地区、Ｄ地区の調査を行なう。Ｂ地区Ｄ地区とも数箇所グリットをあけるが、土器が数点出土したのみである。

発　掘　風　景

8月1日　第1号住居址の炉が検出される。炉内には焼土はほとんどみられない。床面からの遺物の出土は少なかった。

8月2日　ロームマウンドの断面を調べる。第1号住居址の東側を調査する。

8月4日　第1号住居址内を細かく調べる。壁に小さなピットがあるため精査する。

第1号土壙のロームマウンドを取り除く。

8月5日　第1号住居址の東側より集石が検出される。第2号集石とする。

第1号住居址、第1号土壙の写真を写す。

8月6日　遺構測量を行なう。

8月8日　遺構測量を行なう。

8月9日　全体測量を行なう。

8月11日　本日で現場作業を終える。土器洗浄を行なう。

（伊藤　修）

頑張っています

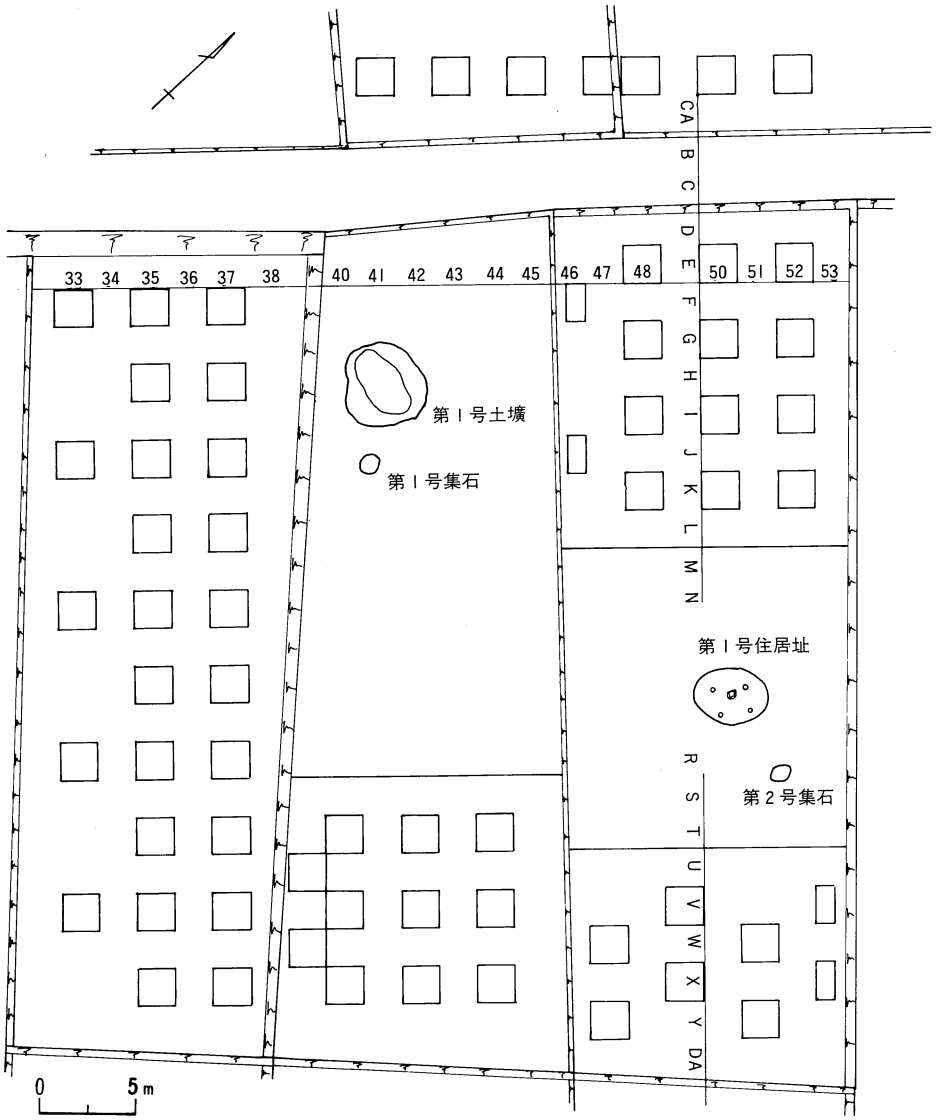
〔参加者名簿〕

木下衛、江端金次郎、高坂文四郎、内山四五六、宮下市郎、星野一雄、青木寿子、中村久子、平沢かずえ、森下安夫、木下みさお、中村芳子、知久かずえ、荒井久美子、青木里美、山口繁弥、中村雅子

第Ⅰ号住居址調査風景

第Ⅲ章　遺　　構

今回の調査で住居址１箇所、ロームマウンドを伴なう土壙１箇所、集石２箇所が検出された。住居址は調査地区の東側より検出され、その東側からは集石が検出された。土壙は、住居址から西へ約25ｍの所に検出され、土壙の南東からは集石が検出された。



第３図　遺構配置図（１：400）

第1節　住　居　址

第1号住居址　（第4図、図版第3）

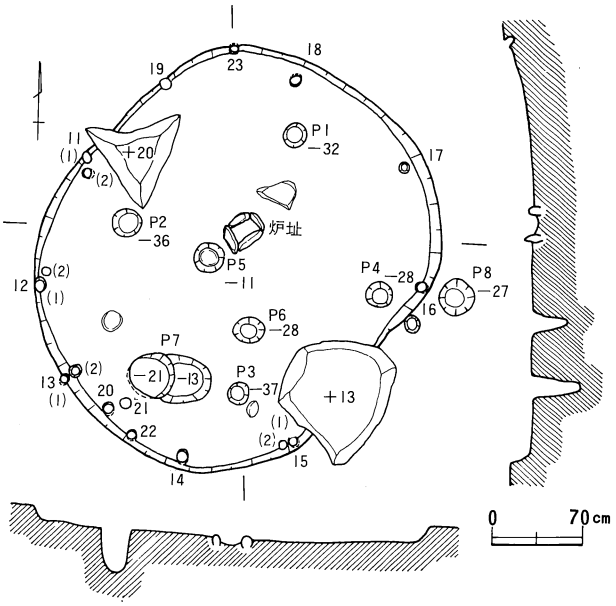
調査地区の東側に位置し、楕円形を呈する住居址である。長径3 m40cm、短径2 m90cmを計り、小型のまとまった感じのものである。

床は砂質ロームを掘り込んで造られている。床面は比較的平坦で柔らかく、中央部はやや低くなっている。壁は水田の造成時に上部を壊されたと思われ、北側で5 cm、西側・東側で10cm、南側で15cmと低い。炉は中央やや北側にあり、4個の花崗岩と砂岩で方形に造られている。炉石の一部に火を受けた跡がみられる。炉内からは、僅か炭化物の小片が検出されただけである。住居址内には、70～100cmの自然の転石があり、いずれも上面が平坦であり、何等かの形で使用されたと思われる。

主柱穴は、P_1、P_2、P_3、P_4が考えられ、柱の間隔は1 m50cm前後である。また住居址の壁、あるいは壁付近に18箇所の小ピットが検出された。このうち、P_{11}～P_{19}はP_{15}、P_{16}間を除くと、ほぼ80cm～100cmの間隔で巡っている。P_{15}、P_{16}間は他の間隔の約2倍あり、扁平な大石もあり、ここが入口ではないかとも考えられる。P_{11}～P_{23}について整理してみると表1の様になる。

ピットの大きさは5 m～12cmである。穴の向きは直のもの、住居址の外側へ向くもの、住居址の内側へ向くものなど一定でないが、あまり大きな傾きはない。深さは5 cm～19cmとさまざまであり、10cm前後のものが多い。当時の住居址の建築を研究する上で貴重な資料である。

遺物は、土器（第9・10図）、石器（第12図）が出土した。縄文時代中期中葉前半に比定される。



第4図　第1号住居址（1：60）

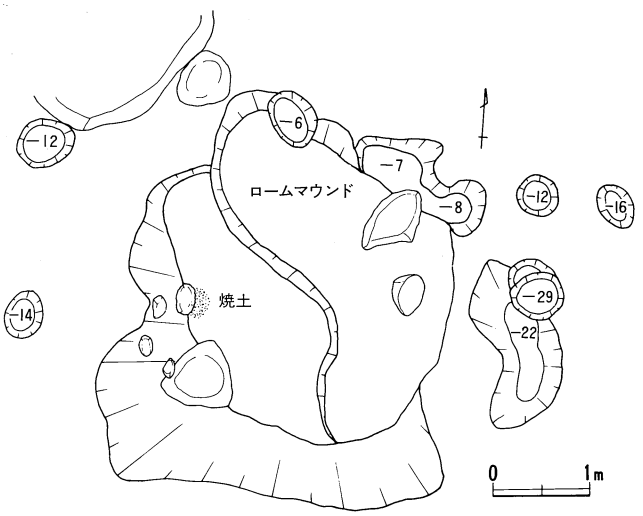
第1表　小ピット一覧表（cm）

P	11		12		13		14	15		16	17	18	19	20	21	22	23
	(1)	(2)	(1)	(2)	(1)	(2)		(1)	(2)								
深　さ	8	11	16	10	8	15	19	7	7	10	11	9	13	10	10	10	5
上　φ	7	9	12	9	5	10	11	9	6	10	8	9	9	9	10	8	6
下　φ	7	6	7	9	4	7	10	8	6	9	6	9	8	9	9	7	7
向　き	直	東	北	直	南	直	南	東	直	東	直	北	直	南	南	南	北

第2節　その他の遺構

第1号土壙（第5・6図、図版第3）

調査地区の中央やや西側に位置し、ロームマウンドを伴う土壙である。土壙は約3m×3.5mの不規則な形を呈し、砂質ロームを掘り込んで造られている。土壙の壁は西側は比較的傾斜があり、東側は緩やかで50cm前後の自然の転石が7個ほどみられる。土壙内は黒色土が充満しており、西側の覆土上層には風化した石と焼土、炭化物の小片がみられた。

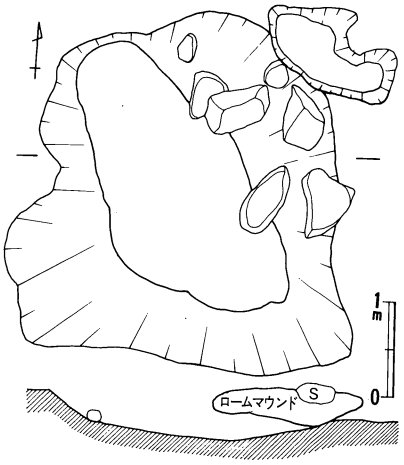


第5図　ロームマウンド（第1号土壙）

ロームマウンドは、土壙の東部分にみられる。マウンドの厚さは、30cm～40cmで、ロームを中心に黒色土のブロックと60cm前後の自然石からなっている。

土壙付近には数個のピットがみられるが、これらの間には規則性はない。

遺物は、土壙覆土中、土壙の東側から比較的多く出土した。また、土壙の南側ＣＫ40からは、一



第6図　第1号土壙（1：80）

括土器が出土したが、この土器が、土壙に関係あるかどうかは明らかでない。

第１号集石　（第７図、図版第５）

ＣＪ40グリットを中心に検出された。約60㎝の自然の転石を中心にして、拳大から人頭大の石によって構成されている。検出された石は40個程度で、自然石の南側に集中している。礫は殆んどが花崗岩であり、砂岩も僅か入っている。

石は全体に無雑作に置かれ、規則性はみられない。層位的には、黒褐色土層にあり、自然石はローム層にくい込んでいる。大部分の石は火を受けていないが、一部火を受けた石がみられる。

遺物は、集石内からは出土せず、遺構付近にもあまりみられなかった。

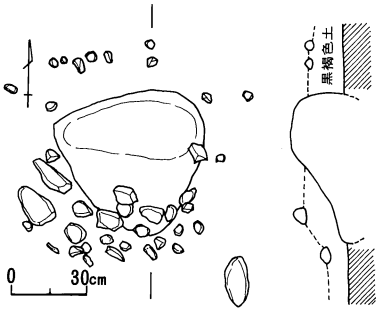
第２号集石　（第８図、図版第４）

ＣＲ52グリットを中心に検出された。５㎝～25㎝の自然石約70個より構成されている。

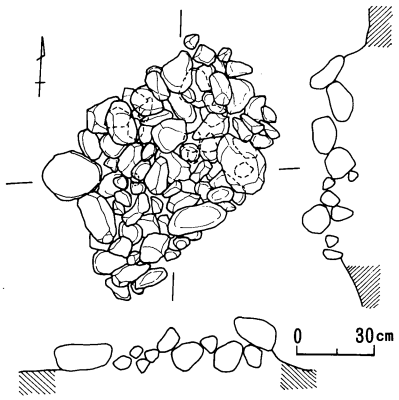
礫は殆んどが花崗岩である。中には、火を受けた跡のみえる石もある。集石は、110㎝×90㎝の菱形にまとまっていた。集石は二重になっており上側は大きな石が多く、下側は比較的小さな石が多かった。

集石は黒褐色土層中にみられ、集石の間は黒色土が充満していた。

遺物は、集石内より一点出土したが、小破片であり、時期の決め手にはならなかった。遺構付近からの遺物の出土も少なかった。　　（伊藤　修）



第７図　第１号集石（１：30）



第８図　第２号集石（１：30）

第Ⅳ章　遺　　物

第１節　第１号住居址の遺物

（第９図、第10図）　第１号住居址からは、ほぼ完形の土器２個、半完形の土器２個、器形復元のできる土器３個、土器片多数が出土した。第９図１は、覆土下層よりつぶれた状態で出土した大形の深鉢である。色調は、暗褐色あるいは赤褐色を呈す。器面調整は良く、焼成も良い。器面に炭化物等の付着はみられない。文様構成についてみると口頸部は、三角形、小判形の隆帯、雲形浮帯文がみられ、胴部は、隆帯による三角形、小判形の区画と小形連続刺突文がみられる。本土器と類似のものとしては、九兵衛尾根第３号住居址床上の土器[(1)]があげられる。２は、覆土下層より出土した口縁部が内反する深鉢である。色調は暗褐色を呈し、胎土には石英・長石が混入されている。文様は、口頸部に４箇所縦に２本の隆帯がみられ、口頸部から胴部にかけて粗い縄文がみられる。３は、覆土下層から出土したものである。色調は、赤褐色を呈し、胴部から頸部にかけては、炭化物が付着し黒褐色を呈する。胎土には、石英、長石、雲母等が多量に含まれている。文様は竹管を用いており、平出第３類Ａと呼ばれているものである。４は、覆土下層から出土した浅鉢である。色調は、黄褐色あるいは黒褐色を呈し、胎土に雲母、長石等を含む。文様は内傾する口縁部に連続刺突文、竹管による隆帯がみられる。本土器と類似のものに茅野和田遺跡６号住居址の浅鉢形土器[(2)]がある。５は、P_4 上より出土した。色調は赤褐色を呈し、 胎土には雲母、長石等が混入されている。器内面には全面炭化物が付着し、内面底部には炭化物がみられない。その他第１号住居址からは、（第10図１～17）の土器片が出土している。14は、黄褐色を呈した厚さ9㎜前後の土器である。胎土には、長石、石英等が混入されている。文様は、縄文とＳ字状結節から構成されている。これと類似のものとしては、辰野町小野土人畑[(3)]、伊那市富県[(4)]の出土土器がある。第１号住居址出土の土器は、総じて新道式に比定される。

石器（第12図）　石器は覆土、床面とも土器の出土に比べて少なかった。打製石斧と石匙の２種類のみである。石材は、いずれも硬砂岩製である。

第２節　第１号土壙の遺物

土壙の遺物

土器(第10図18～30)（18～21)は土壙底部よりの出土である。18は口縁部に折り返しのみられる器形である。色調は赤褐色を呈する。文様は、口縁部より頸部にかけて縄文が施されている。(22～30)は土壙覆土よりの出土である。22は口縁部がわずかに折り返されている。色調は褐色を呈し、器面調整は良く、焼成も良い。胎土には、石英、長石、雲母等が混入されている。文様構成については、口縁部に３本の沈線が横走し、その間は縄文が施されそれから下には、傾きをもった小判形の隆帯、半割竹管による隆帯、縄文がみられる。23～25は、同一群と思われる。色調は、赤褐色を呈し、胎土には長石、石英等が相当量混じっている。文様は、半割竹管による隆帯と、縄文、交互する三角形連続文からなっている。恐らく、梨久保式[(5)]に比定されると思われる。26は、黄褐色を呈した、器面調整、焼成の良い土器である。右上には、直径６㎜の穴があけられており、器面には赤色の塗料がみられる。文様は、横走する隆帯に、連続の刺突が施され、その下には松葉状の沈線がみられる。おそらく縄文時代後期の土器と思われる。

土壙底部、覆土からの石器の出土はなかった。

土壙付近

土器（第10図31～39）　31・32は、26と同一個体と思われる。34は、暗褐色を呈し、胎土に長石、石英を含んだ土器である。文様は、波状に隆起した口縁部から太い隆帯がおり、それから横に押し引による沈線が４条走っている。35は、暗褐色を呈し、器面調整、焼成の良い土器である。文様は口縁部には、浅く横走する沈線がみられる。39は、網代底である。色調は、黄褐色を呈し、胎土には、大粒の石英、長石がみられる。

石器（第12図９～13）　打製石斧３個、横刃形石器１個、小形の石錐１個が出土している。石材は、いずれも硬砂岩である。

第３節　その他

土器（第９・11図）第９図７は、ＣＫ40グリット出土の半完形の桶状の浅鉢である。外反する口縁部には縦に連続刺突文がみられ、その下は隆帯による横帯、小判形の区画の中に山

形・直線などによる連続刺突文がみられる。本土器と類似のものに井戸尻２号住居出土の土器がある。本土器が狢沢式に比定[5]されるとすれば編年的に第１号住居址出土の土器より僅かに新しくなり、第１号住居址と同時期に使われたものか時期的な差がみられるか、更に検討を要する。その他注目するのに第11図８、９、41がある。８は、赤褐色を呈し、胎土に長石、石英を含んだ土器である。文様は、口縁部に紐状の隆帯を縦横に貼りつけたものである。縄文中期後葉のものと思われる。９は暗褐色を呈し、胎土には、長石、石英等が多量に含まれている。文様は、地文に縄文を使い、半割竹管による２条の沈線から構成されている。41は、赤褐色を呈し、胎土に長石、石英等を含んだ土器の底部である。器形は、底部のやや上でくびれており、それから胴部にかけて脹らみをもっている。

石器（第12図14～20）打製石斧７個が出土している。石材は、いずれも硬砂岩である。

（註）

1．藤森栄一編「井戸尻」中央公論美術出版　昭和40年

2．茅野市教育委員会「茅野和田遺跡」昭和45年

3．上伊那誌刊行会「長野県上伊那誌第２巻　歴史篇」

4．（３）に同じ

5．長野県考古学会「長野県考古学会誌第３号　長野県岡谷市梨久保遺跡の再調査」昭和40年

6．（１）に同じ

第V章　所　　見

今回調査の行なわれた太田ノ沢春日平遺跡は、昭和50年度県営圃場整備工事によって緊急発掘が実施された遺跡である。本調査で得た一、二の問題点について述べて所見としたい。

1．本遺跡は、太田ノ沢の沢底という特定な場所に所在する遺跡である。周辺の諸遺跡と比較して見ると次の表の様になる。

遺跡名	先土器時代	縄文時代						弥生時代			古墳		平安時代		中世	備考
		草創期	早期	前期	中期	後期	晩期	前期	中期	後期	土師	須恵	灰釉	その他		
庚申平					○											
太田ノ沢春日平					○	○	○		○		○					
久根平					○											
椰ノ脇					○											
町谷				○	○		○			○						
春日平中原				○	○	○	○									
太田ノ沢					○		○									
高尾1					○											
高尾2			○		○											
高尾3					○											

山麓地帯には縄文中期の椰ノ脇遺跡が所在する。山麓地帯をやや下った中央道地帯の遺跡は、小さい沢を横切って分布している。そのうち庚申平遺跡は縄文中期、太田ノ沢春日平遺跡は、縄文中期・後期・晩期・弥生中期・古墳時代の遺跡、久根平遺跡は中田切川と太田ノ沢にはさまれた段丘上の遺跡で縄文中期、久根平東遺跡は同じ段丘上に分布する遺跡で、縄文早期・中期の遺跡である。春日平中原遺跡からは、開墾時に縄文前期・中期・後期・晩期等の遺物が発見されている。中原遺跡より一段高い台地に所在する町谷遺跡は、49年度圃場整備事業で発掘された遺跡で、縄文中期・弥生後期の住居址が発見され、この期の集落址であることが確認された遺跡である。今回は発見されなかったが、以前縄文前期の遺物が出土している。以上隣接している遺跡を一見した結果、縄文早期前期の遺物は台地上に分布しているが、段丘下の低い遺跡には認められない。縄文中期になると、高地低地という区別はなくなる様である。後期・晩期は、前期の遺跡につく傾向が見受けられる。弥生式では、小河川の湿地帯周辺の台地に占地している。こうした場所は縄文早期の遺跡の立地にも適合しているようである。

2．今回の調査で発見された住居址は、1軒のみであった。本住居址の特筆すべき一、二の点を述べて見ると、長径3.4m、短径2.9mの小型楕円形の住居址である。主柱穴は4本の一般的なものである。本住居址で特に注意したいのは、壁帯に等間隔に小穴が10個設けられていることと、壁に接して6個の小穴が掘られていることである。壁にそって掘られている例は見受けられるが、壁帯の内側に15～20度内外の角度をもって設けられている例はあまり見受けない。これ等の施設はおそらく壁の保護には相違ないが、当地方に住居にはあまり見られない例である。

3．炉址。住居址の中央やや南寄りに設けられた石囲炉である。炉は小型で一部火を受けている程度で、あまり使用した様子がうかがわれない。こうした例は、当地方では時折見受けられるところである。

4．遺物は、縄文中期前半、諏訪地方で言えば新道式に比定されるものと考えられる。

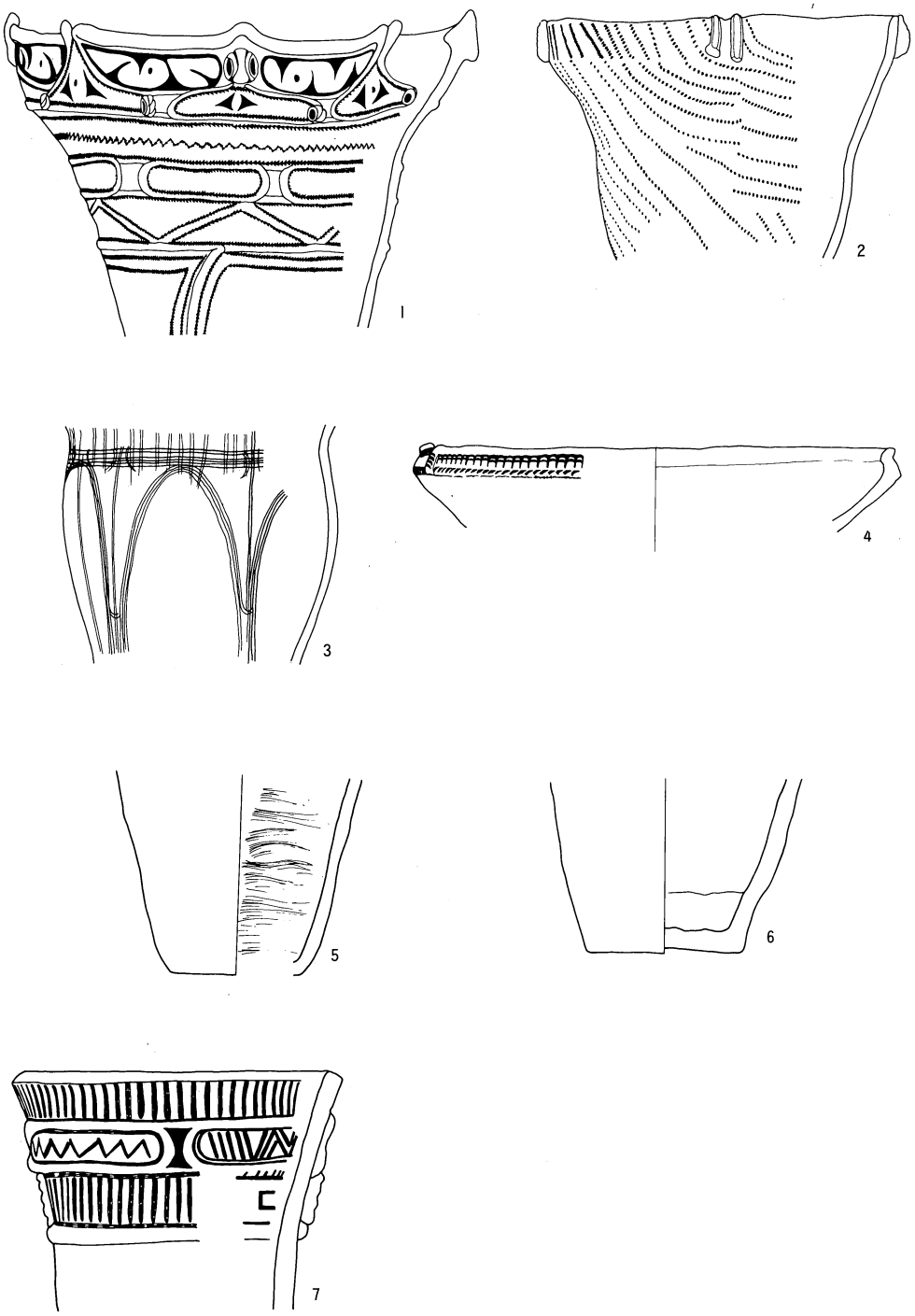
5．ロームマウンド。最近の調査でこの種のロームマウンドが多く発見されているが、時代を決定する遺物の出土をみないので、確定的なことは言えない。私が50年12月発掘した長野県上伊那郡宮田村向山遺跡では、表裏縄文を出土する第5号住居址が、隣接するロームマウンドを切っていることを確認しているから、おそらく表裏縄文の時代には存在したことは確かである。また下限はまだ明らかな資料に接していないので決め付けることを後日にゆずりたい。

6．集石。本遺跡から2箇所、集石を発見した。そのうち第2号集石は、南北 110cm、東西90cmの狭い範囲に限定して作られたものである。こうした例は少ないのであるが、使用目的を明かにすることが現段階ではでき得ない。また、出土遺物も決め手になるものが発見されていない。これも今少し資料の増を待つことにしなければならない。

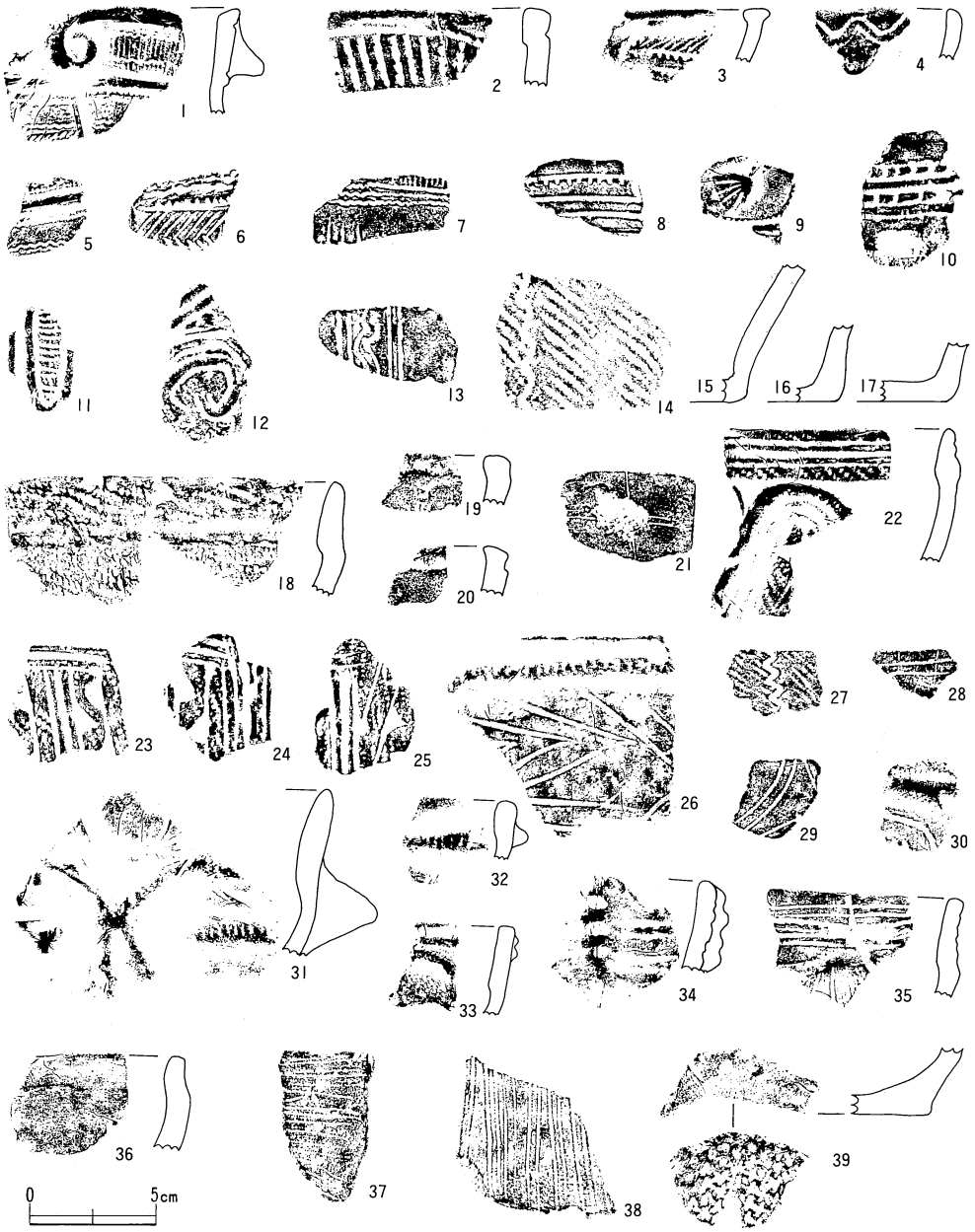
7．出土遺物。新道式、平出三類A式、狢沢式、梨久保式、縄文中期後半の遺物である。

終わりにあたり、直接発掘に御参加戴いた方々、地元、飯島町、飯島町教育委員会、南信土地改良事務所等の熱意ある御支援を心より感謝申し上げる次第であります。

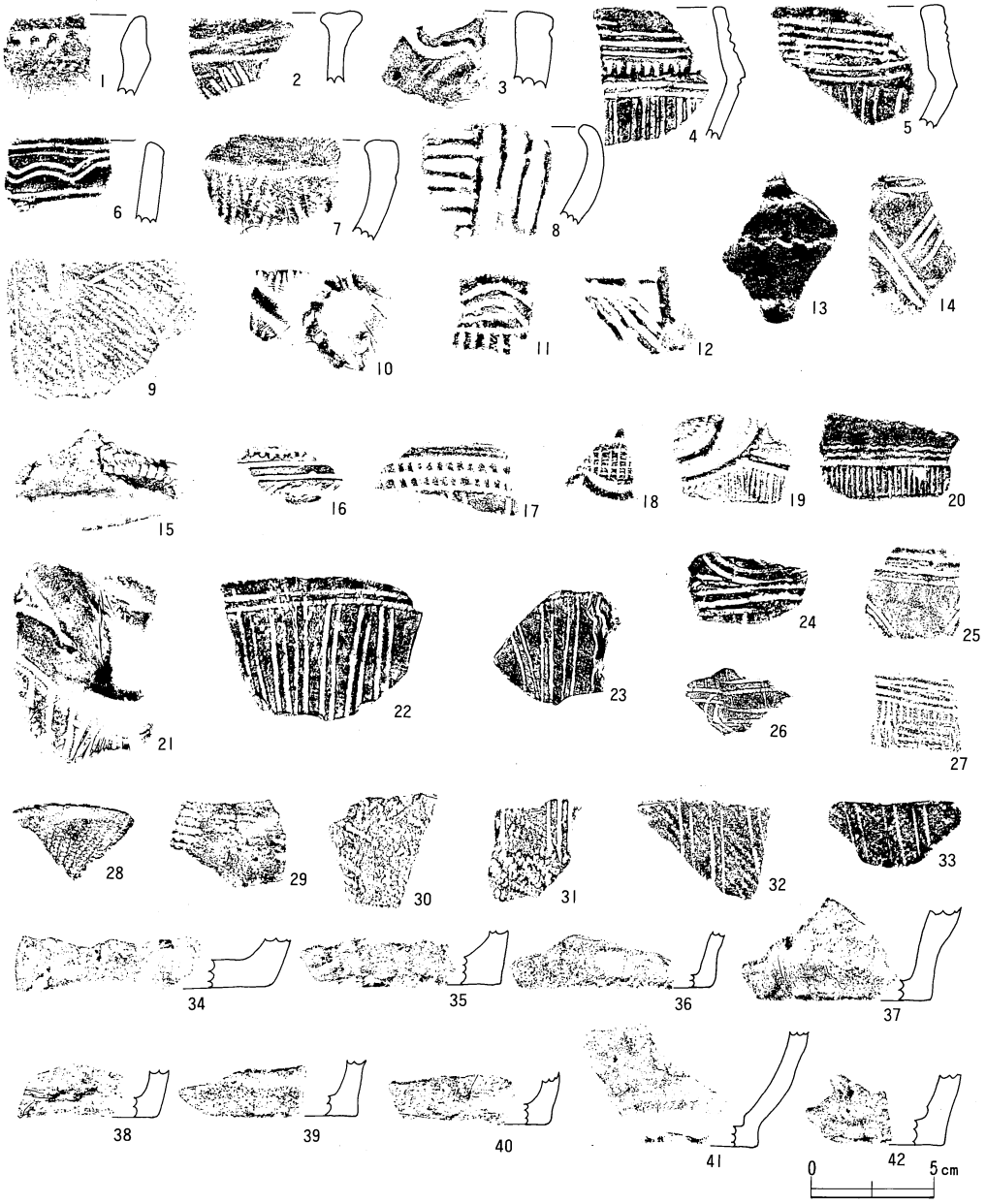
（調査団を代表して友野良一）



第９図　縄文式土器（１～４　１：６、５～７　１：４）
１～６　１号住、７　その他



第10図　縄文式土器（1：3）
1～17　1号住、18～21　土壙底部、22～30　土壙覆土、31～39　土壙付近



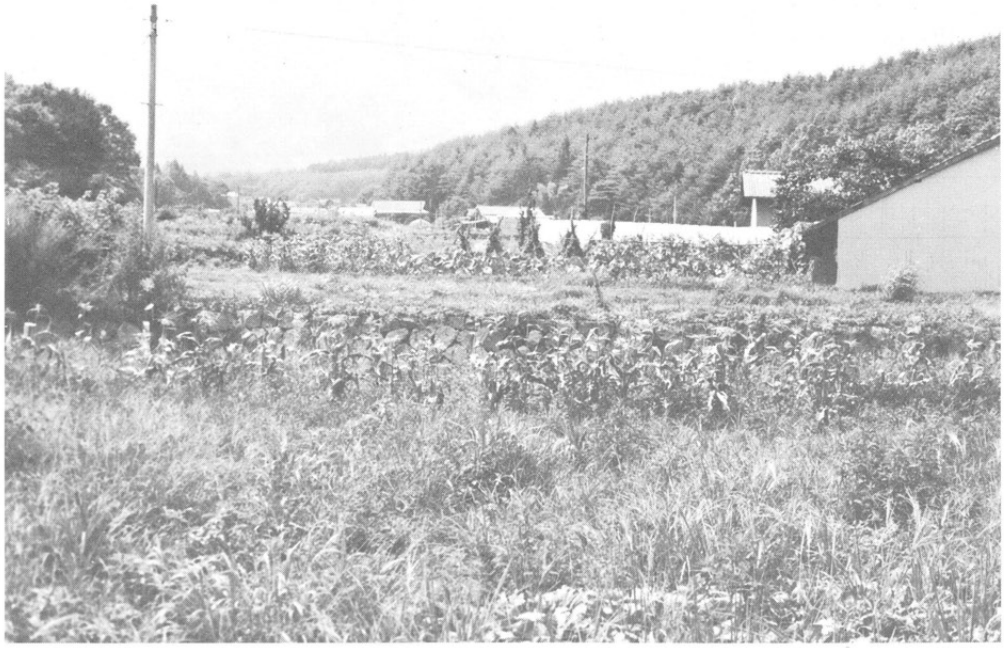
第11図　縄文式土器（1：3）その他

第12図　縄文時代の石器（1：3）
1～2　1住床面、3～8　1住覆土、9～13　土壙付近、14～20　その他

遺　跡　遠　景（南東より）

遺　跡　近　景（西より）

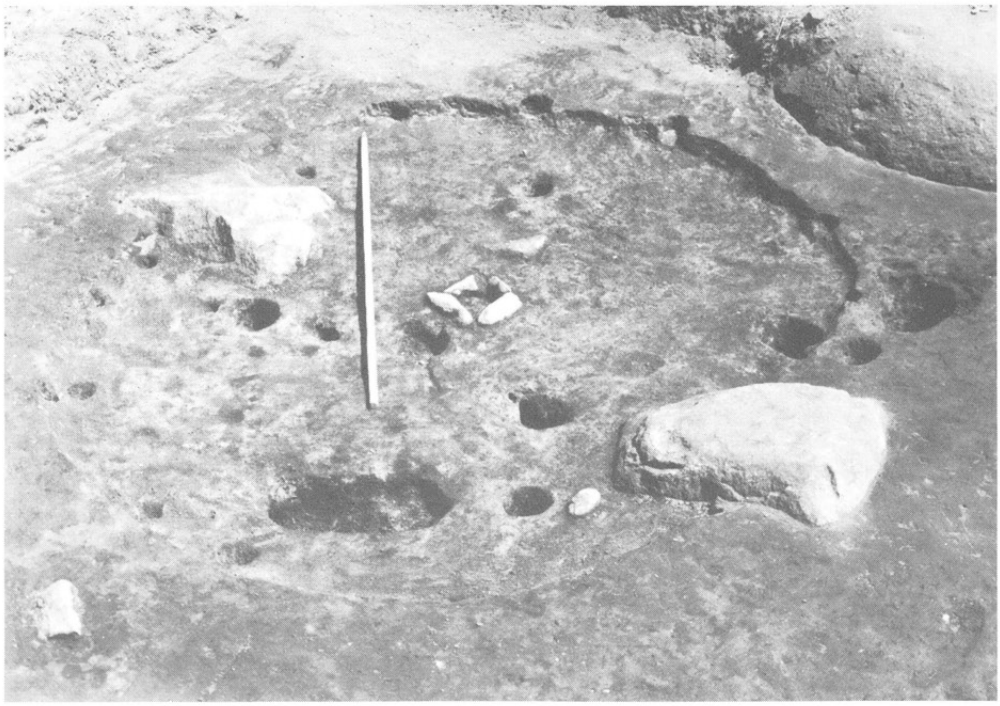
図版第二　遺跡近景



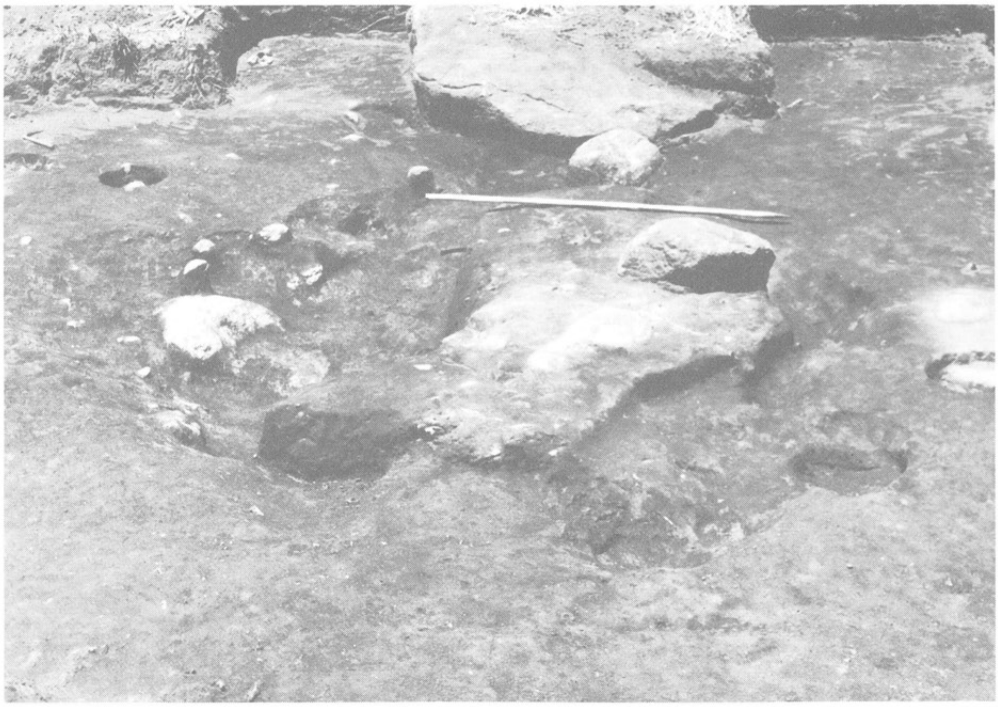
遺　跡　近　景（東より）

遺　跡　近　景（南より）

図版第三　第一号住居址・第一号土壙

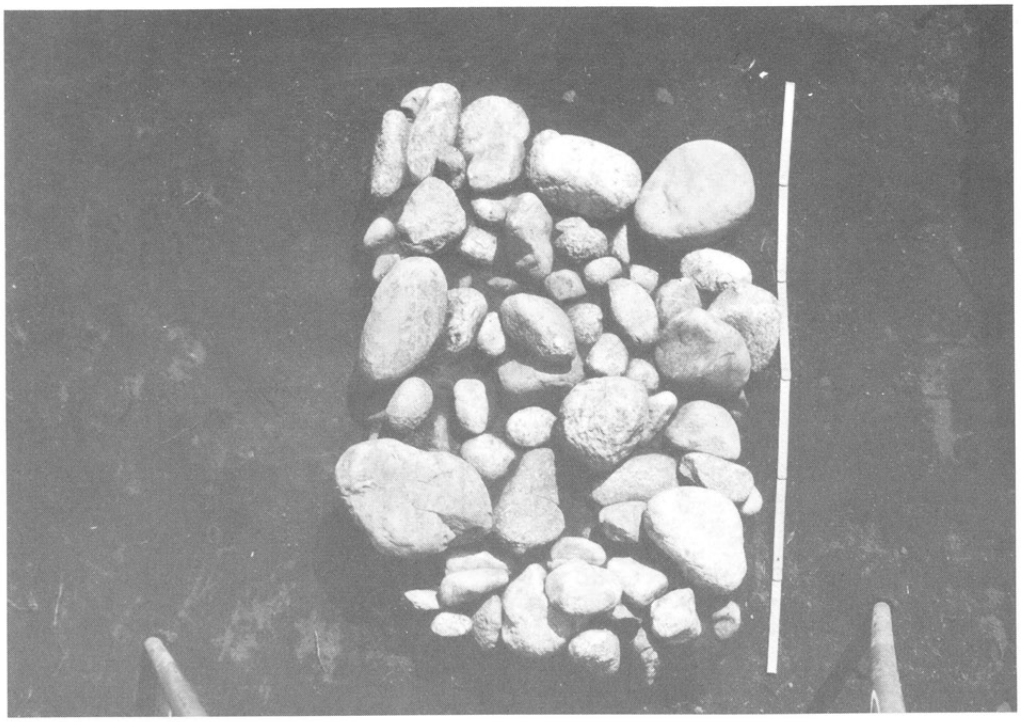


第1号　住居址（南より）



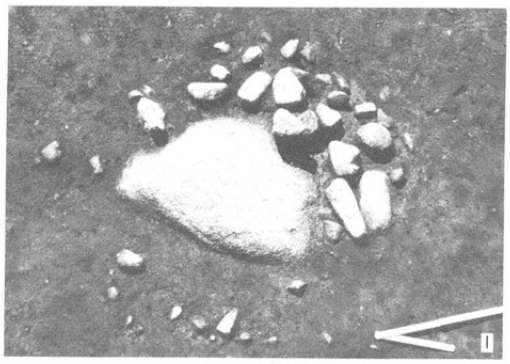
第1号　土　　壙（東より）

図版第四　第二号集石・記念撮影



第2号　集　　石

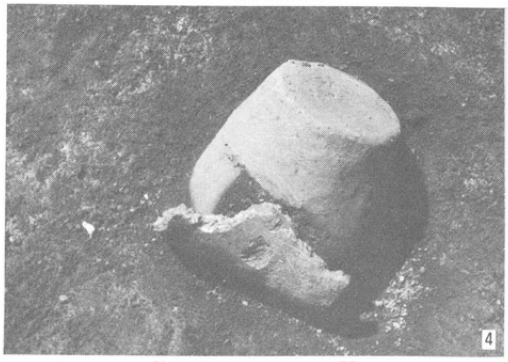
記　念　撮　影



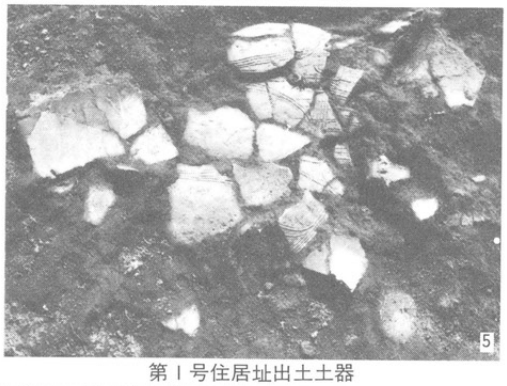
第Ⅰ号集石

第Ⅰ号住居址炉

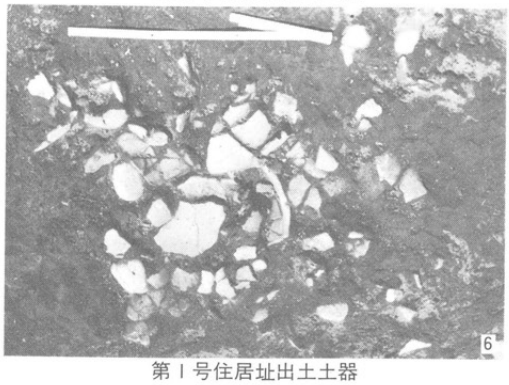
第Ⅰ号住居址出土土器



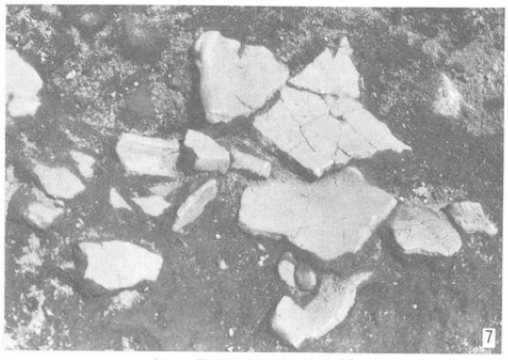
第Ⅰ号住居址出土土器



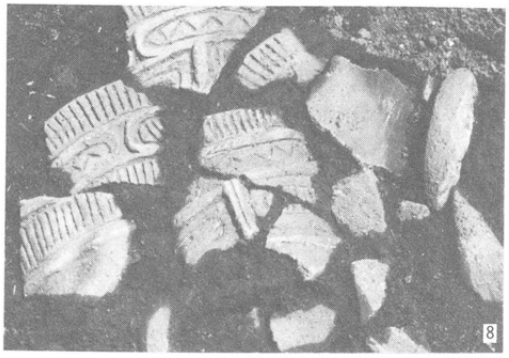
第Ⅰ号住居址出土土器



第Ⅰ号住居址出土土器



第Ⅰ号住居址出土土器



ＣＫ40出土土器

図版第六　出土土器

1

第Ⅰ号住

2

第Ⅰ号住

3

第Ⅰ号住

4

第Ⅰ号住

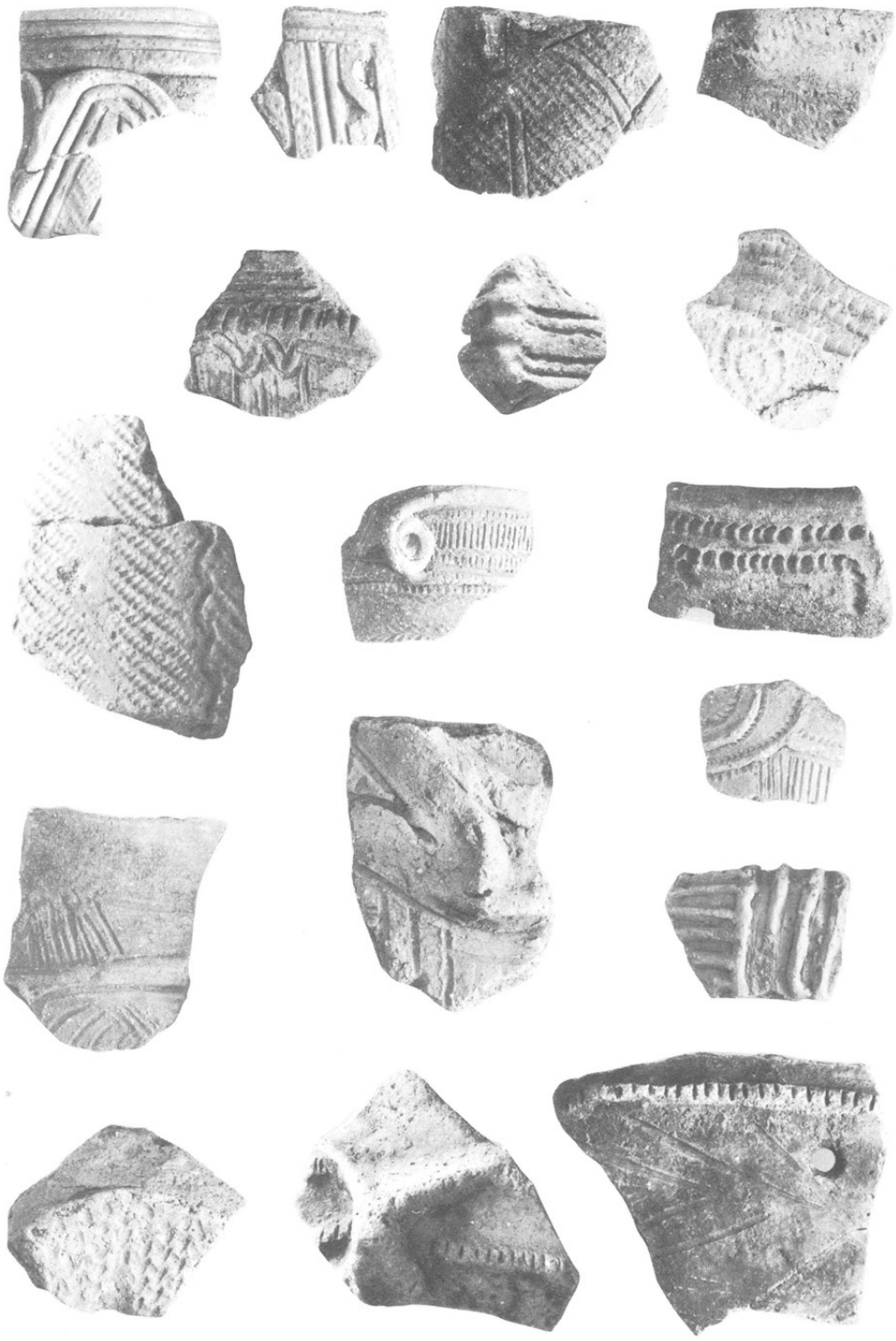
5

第Ⅰ号住

6

その他

図版第七　出土土器



あ と が き

昭和49年度、県営圃場整備地区内の遺跡として町谷遺跡の発掘に引続き、本年は隣接の太田ノ沢春日平遺跡の緊急発掘が予定どおり完了し、ここに調査報告書がまとまり記録保存が出来得るに当り、本調査に御指導、御協力を頂いたそれぞれの関係各位に感謝と敬意を表します。

発掘の経過については本文に詳述されており、緊急発掘に依り高密度で分布している当町の西北部一帯の遺跡群の実態が逐次解明され、郷土の古代の歴史や文化の流れを探求し得る事の機会に恵まれた事は幸と思える。

尚、発掘参加を通じて地区の方々の郷土研究への関心が一段と高まってきたことは喜ばしい。

昭和51年３月10日

飯島町教育長　**織　田　正　巳**

太田ノ沢春日平

〰〰緊急発掘調査報告〰〰

昭和51年３月15日　印刷
昭和51年３月20日　発行

発 行 所　長野県上伊那郡飯島町教育委員会
南 信 土 地 改 良 事 務 所

印 刷 所　伊 那 市　小松総合印刷株式会社